
ラーメン馬鹿

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラーメン馬鹿

【Nコード】

N8435F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

九州のラーメンに命をかける夫婦。情熱のままに突き進む二人の前にライバル登場、だが二人は負けずさらに上に突き進むと決意するのだった。

第一章

ラーメン馬鹿

城嶋雄大はこの時福岡ドームにいた。そしてそこでこれまでにな
い程立腹を見せていたのであった。

「駄目と」

こう言うのだった。

「このままじゃいかんと。何をやっとおと」

「あんた何言っとおと」

その横にいる女房の麗が声をかけてきた。二人共完全に地元の鹿
児島の言葉になっている。

「今日ホークス買ったとよ。嬉しかこととね」

「それはよかつばってん」

それはいいと言う雄大だった。

「ホークス買ったんはおいどんにとってホンマによかことじゃ」

「じゃあ何でそんなに頭にきとおと」

「このラーメンじゃ」

彼はラーメンのことを言うのであった。

「この福岡ドームのラーメン」

「王さんが考えたラーメンとね」

「まっところまかったい」

こう言うのである。

「見事じゃ。やっぱり九州のラーメンはこうでなくてはいかんたい」
今度はいささかこの言葉も入っているようである。

「このスープと麺でな」

「確かにそうたいね」

麗は少女めいた可愛らしい、年齢よりもまだ若く見えるその顔で
頷く。長めの黒髪は後ろで束ねている。雄大はというとその大柄で
柔道選手みたいな顔と身体で思いきりラーメンを啜っていた。その

白いラーメンを。

「このラーメン、何もかもよかとよ」

「それがいかんたい」

彼はこう言うのだ。

「この美味さ、おいどんのラーメンよりまだ上じゃ」

「上じゃまずかと?」

「王さんは野球では世界一じゃ」

伊達に八六八本もホームランを打ってはいない。しかも一塁手としての守備にも定評がありホークスの監督しても三回も日本一に輝いている。やはり見事な成績だ。

「けんどもな」

「ラーメンはちがつとると言うかね」

「そういうことじゃ。ラーメンはおいどんが世界一じゃ」

「こう言うのである。」

「だから。それに負けたのが」

「くやしうかね」

「そういうことじゃ。おいどんのラーメンより上」

このことをまた言う。大きな顔がホークスが負けた時以上に歪んでいる。

「こんなこと忘れんとよ」

「ほならどげんするとね」

「決まっとおと」

すぐに女房に答えるのだった。

「今日は家帰って」

「ほい、家帰って」

「ラーメンの研究じゃ」

「早速作るとね」

「今日店は休みじゃ」

二人は博多の屋台でアーメン屋をやっているのだ。博多ではそうした屋台の店が実に多い。

「幸いな」

「だけん勉強はするとね」

「そつたい」

彼ははつきりと女房に答えた。

「じゃあ戻ると。よかとね」

「ああ。わかつたたいよ」

二人はかなり強い九州弁で言い合って話を進めていく。

「そんだつたら今すぐに」

「帰るつたい」

こうして実際に二人の家、小さなアパートに戻ってそこで殆ど徹夜でラーメンの研究をするのだった。こうしたことがしょっちゅうである。そしてそれは店のラーメンにも実際に出ていた。

「おつ、何かラーメンがまた」

「美味くなつとつたい」

部活帰りの高校生達が二人の屋台のラーメンを食べて笑顔で言った。二人は博多の街で夕方から屋台を出している。左手には川がありそこを背にしている。そこで木の粗末なテーブルも出して客を受けているのである。高校生達は詰襟の制服のまま屋台の席で並んでラーメンを食べているのだ。

「スープのコクもよかし」

「麵の味も」

「勉強したとよ」

こう答えたのは麗だった。皆からはおかみさんと呼ばれている。

白い頭の三角巾に割烹着が実によく似合っている。雄大も白い料理人の服である。

「またね」

「そいでこんなに美味くなつたとね」

「いや、おかみさんやるとね」

「勉強したのはおいどんもね」

ここで雄大が鹿児島弁も混ざった言葉で言うのだった。

「おいどんもちゃんと勉強したとよ」

「ああ、それはわかつとおと」

「旦那さんもいるのはね」

「わかつてたらしいとよ」

雄大は彼等の言葉に腕を組んで納得するのだった。

「それでもそんだけ味はよくなつとおとか」

「ああ、すんごく」

「やっぱり九州のラーメンになつとるとよ」

「九州のラーメンは豚骨ばい」

高校生達は口々に言うのだった、

「最近それも忘れちよる店もあつし」

「こうして白いスープに細い麺ばちゃんと出してくれっのもいいばい」

「東京のラーメンは邪道じゃ」

「そつたい」

雄大と麗はそれはすぐに言うのだった。

「だから小久保もすぐに戻ってきたつとたい」

「福岡にな」

「あら巨人がアホたい」

「あいつ等が強奪したとね」

高校生達は小久保と聞いてすぐにこう返した。

「そこでこつちが取り返したとね」

「今度日本シリーズで会つたらギツタンギツタンじゃ」

「腕の五本や十本は覚悟させたるわ」

ソフトバンクファンも巨人には恨みがあるのであった。巨人こそはまさに全ての野球ファンの、野球を愛する日本国民の共通の怨敵である。

「まあそんで東京のラーメンは」

「巨人のまずい味がするたい」

東京風のラーメンをあくまでけなすのだった。

「あんなんよりやっぱりこの豚骨ラーメン」

「これたい」

「じゃがその九州ラーメンも味は色々ばい」

「そうだい」

今度はその九州ラーメン自体についての話になった。

「美味かものもあればまずかものもある」

「ここはまた美味かなくなるとるけどもな」

「勉強した結果じゃ」

「その通りばい」

また言う雄大と麗だった。

第二章

「さもないとこれだけの味は出せんよ」

「まずかラーメン出したら鹿児島之母ちゃん達に怒られるったいね」

「鹿児島たいね」

「けんどもこのラーメンの味は鹿児島じゃなかとね」

「九州たい」

「そればい」

二人は自分達のラーメンを九州のものだと言っているのである。

「おいどん等は九州ラーメンば作っとおとよ」

「最高の九州ラーメンたいよ」

「へえ、じゃおい等今九州で最高のラーメン食っとるとね」

「その通りばい」

「じゃあ次は日本で最高のラーメン食いたいとね」

「そうたいね」

調子に乗ってか今度はこんなことを言う彼等であった。

「日本で最高のラーメン」

「食いたいと」

「ああ、すぐにそうなったるったい」

「待っとるとええばい」

二人も彼等の今の言葉を笑顔で受けた。そうしてまたラーメンの勉強に励む。そんな日々を過ごしているうちに二人のラーメンは地元で話題になりやがてネットやマスコミで全国に知られ。遂にはテレビで放送されるまでになった。この日テレビで有名な美人アナウンサーが来て二人のラーメンを取材に来たのであった。全国区の番組である。

「このラーメンが今話題になってるんですけれど」

「んっ！？そうばい？」

「初耳とよ」

実は取材が来るというのも今はじめて思い出した二人だった。テレビのカメラやマイクを見てキョトンとさえしている。話は聞いていたが完全に忘れてしまっていたのだ。

「道理で最近客が多かと思ったら」

「そんな訳だったとよ」

「そうなんですよ」

アナウンサーは流暢な標準語で二人に言うのだった。

「それで今回こうしてですね」

「うちのラーメン食べにきたとね」

「そげんことね」

「はい、そうです」

こう二人にまた言った。

「それですね。是非一杯」

「よし、わかったとよ」

「今作るばい」

「最高のラーメンを」

こう応えてから早速ラーメンを作りはじめる二人であった。その間にアナウンサーは屋台の席に座りカメラがそこに向けられる。しかしここで二人が出したラーメンは一つではなかった。

「えっ!？」

「あんた達も食べるとよ」

「ほら、遠慮せんと」

周りのスタッフの分もであった。

「今からどんどん作るとね」

「食べるばい」

「あの、それは」

「いいとよ」

「だから遠慮せんとね」

戸惑いを見せるアナウンサーに対しても言うのであった。彼女の前にラーメンを一つ差し出しながら。そのラーメンの乳白色のスー

プからは湯気が立ちその中には麺とチャーシュー、それにもやしと紅生姜、ゴマが綺麗に置かれていた。豚骨独特の香りさえしてきている。

「ほらほら、食べて」

「皆で」

「冷めんうちにね」

「あの、僕達もって」

「それって」

スタッフ達は生放送にも関わらず戸惑いの声を出してしまった。

「いいんですか？」

「けれど」

「けんどももそんでももなかないよ」

「そうばい」

その戸惑う彼等に対して言う二人であった。

「うちの店に来たらラーメンを食べる」

「それしかなかとね」

「それはそうですけれど」

アナウンサーはここでも戸惑った声になっていた。

「でも」

「だからでももなかとよ」

「ささ、早く」

いささか強引にまた彼等にラーメンを勧める。

第三章

「替え玉もできるかね」

「どんどん食べていきんしゃい」

「は、はい」

「そこまで仰るのなら」

こうしてアナウンサー以外のスタッフにもラーメンが振舞われた。皆そのラーメンを味わってみてそれぞれ驚きの声をあげるのであった。

「おい、やっぱりこれは」

「ああ。噂だけはあるな」

顔を見合わせて言い合うのだった。

「美味しいな」

「そうだな。かなりな」

彼等が食べても美味しいのだった。やはりと言うべきか。

「どうたい、うちのラーメンは」

「日本一とよ」10

「はい、これは確かに」

「これは凄いですよ」

皆こう二人に対しても答えるのだった。

「これだけ美味しいのってやっぱり」

「ないですよ」

「はい、本当に美味しいです」

アナウンサーも二人のラーメンを夢中で食べていた。食べながらその味を確かめていた。その味はまず温かく濃厚なそれでいて粘っこくはない豚骨スープが細い麺に適度に絡み合いその麺はコシだけでなく風味もいいものだった。その味を確かめながら言うのだった。

「スープや麺だけでなく」

「うちの麺はその二つだけじゃないばい」

「葱ももやしもチャーシューも」

「気合入れてやっとなるとよ」

「日本でもトツプクラスですよ」

アナウンサーも太鼓判を押した。

「これに匹敵するって言ったら」

「何とね!？」

「匹敵!？」

この言葉は二人にとっては失言だった。それを聞いてすぐに目の色を変えてきた。

「うちのラーメンに匹敵する相手がおるとね!？」

「それ何処の奴とよ」

「北海道の荒熊っていうお店ですけど」

アナウンサーはまだ自分の失言に気付いてはいなかった。

「そこももうかなり美味しくて」

「ううむ、それは許せんばい」

「うちは日本一とよ」

二人はもう戦闘態勢に入ってしまった。勝手に。

「そんな奴おったら勝負ばい」

「やっつけてやるとよ」

「やっつける、ですか」

「当たり前じゃ。おいどんば薩摩隼人たい」

「うちの薩摩の女子ばい」

完全に鹿児島弁に戻ってしまった。

「そんでどげんして北海道に負けるとよ」

「日本ハムには負けんとよ」

「おい、何かこれでよ」

「ああ、番組できるよな」

失言がはじまりだったがここでスタッフ達は顔を見合わせるのだった。そうしてテレビ局の人間らしい話をはじめのだった。

そうして密かにアナウンサーからカメラを外して。そのうえで彼

女とも話すのだった。

「ねえ里恵ちゃん」

「何ですか？」

「今の状況、使えるから」

「番組にね」

「番組にですか」

それを聞いて彼女も真剣な目になった。この辺りは実にプロらしくかった。

「そうさ。このお店と北海道の荒熊と勝負させてね」

「料理対決を報道しようよ」

「あつ、いいですねそれ」

アナウンサーもそれを聞いて頷くのだった。

「視聴率も取れそうですね」

「そういうこと。それじゃあそれでね」

「はい、それで行きましょう」

「プロデューサーにも話してね」

そこまで話を及ばせるのだった。こうして話を決めてしまった。だがここでは二人に話はしない。そうして日をあらためてこの日のことを隠して二人にまた話す。二人はそれを聞くとスタッフ達の予想通り全身を燃え上がらせて言うのであった。

「よし、勝負ばい！」

「決戦とよ！」

真つ赤に燃えて叫ぶ二人であった。

「必ずおいどん達が勝つとよ！」

「北海道が何たいね！」

屋台のラーメンの麺を捌き、スープを丼に入れながらの言葉であった。

「何があつてもおいどん達は勝つとよ！」

「絶対たい！」

「実はですね」

アナウンサーも真実を隠して二人に話す。スタッフ達はここでもラーメンを食べている。何だかんだでこのラーメンの味に病みつきになっているようである。

「向こうも乗り気で」

「勝負、受けるって言うとなね」

「面白かよ」

ラーメンを客の前に出しながら述べた。

「そげん勇気は認めるたい」

「じゃあ全力でやっつけてやるとね」

「よし、これで話は決まりだな」

「そうだな」

予想以上に簡単に話が簡単に決まったので彼等も内心驚いてはいた。ラーメンを食べつつ顔を見合わせて話をするのであった。

「じゃあ後はだ」

「舞台を考えてだな」

「よし、いよいよこの時が来たとよ！」

「うちのラーメンが日本一になる時たい！」

二人はスタッフの謀略というか考えに気付くことなくまだ炎を燃え上げらせ続けていた。

「その北海道の荒熊！」

「桜島の噴火で吹き飛ばしてやるたい！」

屋台において叫びつつ誓う二人であった。そしてその勝負の時は来た。場所は何故か関ヶ原でありそこで二人はその北海道の荒熊と対峙するのであった。奇しくも向こうも二人であった。

第四章

「ほお、あんた達が俺達の相手か」

「容赦はしないわよ」

見れば二人は兄妹であった。一方が端整な青年でもう一人は爽やかな美少女である。その二人が不敵に笑って雄大達と対峙しているのであった。

「ラーメンの本場北海道で最高と言われた俺達の力」

「ここで見せてあげるわ」

「田中光、舞姉妹です」

あのアナウンサーが雄大達に対して説明する。よりによってその関ヶ原の真ん中でそれぞれ屋台を持って来て対峙するという異常な舞台になっていた。

「その北海道の荒熊の」

「あんた達がか」

「うち等の相手は」

二人はここでも全身に燃え上がる炎を帯びつつ言うのだった。

「おいどん等に倒されるのは」

「覚悟はよかとね」

「あんた達、できるな」

「それもかなりね」

北海道の二人は雄大と麗を見て言ってきた。

「どうやら俺達の相手をするのに相応しいみたいだな」

「これはやりがいがあるわね」

「それはこっちの台詞じゃ」

「そうたい」

二人も同じ調子で言葉を返すのだった。

「伊達においどん等の相手になるわけじゃなかとね」

「かなりできるとね」

「何でそんなのわかったんだ？」

「さあ」

スタッフ達はそれが不思議で仕方がなかった。何時の間にか互いを認めそのうえで対峙するようになっていたのである。

「あれか？超一流にしかわからないっていう」

「それかな、やっぱり」

「むう、これは」

ここで審査委員長のとある料理学校の校長が唸るのだった。豊かな白髪に見事な口髭を生やした袴の男である。外見は見事だがその物腰も重厚なものである。

「この勝負は恐ろしいものになるな」

「恐ろしいですか」

「かつてこの関ヶ原では天下分け目の戦いが行われた」

「この校長はまず歴史から入った。」

「今またそれが行われようとしているのだ」

「ラーメンのですか」

「左様。四百年の時を経て」

話がさらに壮大なものになった。

「今ここに！日本で最高のラーメンが決まるのである！」

「そんな大層な話だったんだ」

「意外だよな」

スタッフ達も実はそこまでは考えていなかったのだ。関ヶ原という舞台にしるそこまでは、なのであった。少なくともこの委員長程ではない。

「さあ諸君！」

委員長は勝手に場を仕切りだした。

「はじめるのだ！完全にして最高の勝負を！」

「何で究極とか至高って言わないんだ？」

「そういう表現が嫌いらしい」

「というかあの漫画が」

微妙に俗に言われるグルメ漫画が嫌いな委員長であった。

「勝負、はじめ！」

こうして運命のラーメン対決がはじまった。雄大達も光達も一斉に勝負に取り掛かった。対決メニューは当然ラーメンである。

「さて、勝負がはじまりましたね」

「見事だ」

とりあえず普通の番組進行をしようとするアナウンサーに対して委員長はそんなつもりは全くなかった。あくまで彼の世界のことを考えているだけだ。

「この流れ。実にな」

「流れですか」

「見るのだ」

委員長はここでまた言った。

「あのスープ」

「スープですか」

「どちらもただ濃厚なダシを取っているだけではない」

委員長の言葉が続く。

「豚骨にプラスチックを入れてるな」

「プラスチックですか」

「野菜や生姜も入れてただの豚骨だけの風味にはしていない」

「豚骨だけじゃないんですか」

「その通り」

委員長はまた言った。

第五章

「野菜や生姜を入れればその風味も生きるのだ」

「スープにですか」

「そしてその豚骨自体もだ」

彼はその豚骨も見ている。

「肉もふんだんに付けている。おまけにじっくりと煮込み」

「ダシを取っているんですね」

「スープにも工夫が必要なのだ」

「それはわかりますけれど」

「スープはラーメンの基本だ」

これは言うまでもないことだった。

「そして」

「そして？」

「ああして豚骨や野菜に生姜まで入れてスープを完成させようとしている。ラーメンは一日にして、スープは一日にしてならず！」

今度は断言であった。

「双方共それがよくわかっている」

「そうですね」

「そして次はだ」

委員長の目はスープにだけ向けられてはいなかった。

「麺だ」

「麺ですか」

「どちらも自分で作っている」

委員長は一目見ただけでそのことを見抜いたのであった。この辺りの目も流石だった。

「九州の麺は細く」

「はい」

「そして北海道の麺は太めだな」

「そういう違いがあるんですか」

「屋台だからその太さは限られているが」

「そうなんですか？」

アナウンサーはこの辺りの知識は乏しかった。

「屋台だと麺が細いんですか」

「屋台はスピードが勝負だ」

これは屋台のラーメンの鉄則である。お客さんを待たせてはどうかにもならないということである。委員長は正論を述べていたのであった。

「だから手早く茹でる為に」

「麺を細くですね」

「その通り」

委員長は断言した。

「だから屋台の麺は細いのだ」

「そういうことだったんですか」

「どちらも豚骨だが」

「それでも違いがあるんですね」

今度の話はそれぞれのラーメンの違いに移っていた。

「同じ豚骨でも」

「豚骨といえどもそれぞれの味があるもの」

委員長は断言する。

「そう。北海道には北海道。味噌だ」

「味噌ですか」

「味噌に大蒜が入る。そして九州ラーメンは紅生姜と胡麻が生きる」

「北海道はスープの味、そして九州は薬味ですね」

「それだけではない。作り方によっても変わる」

「同じ素材でもなんですか」

アナウンサーにとっては目から鱗の言葉であった。実は彼女は素材が同じならばそれで同じものになるかと思っていたのである。ところがであった。

「はあ。それはまた」

「今その違いがわかる」

委員長の言葉は続く。

「今な」

「あと五分です」

ここで放送が入った。

「あと五分で作り時間は終わりです」

「麗！」

「わかつてるばい！」

麗は雄大の言葉に元氣よく答える。今は雄大がスープを作っていて麗が麵を茹でていた。

「このスープで！」

「この麵で！」

まずは丼にスープを入れそこに湯を切った麵を入れる。忽ちのうちにそのラーメンから湯気が立ち起こる。そうしてそこに薬味もやし、チャーシューが素早く入れられていく。

そして北海道側も。今それが完成した。

「舞！」

「兄ちゃん！」

兄妹で声を合わせこちらもラーメンを入れる。やはりこちらもそれぞれ薬味ともやしにチャーシューを入れていく。見れば同じ豚骨でも外見が微妙に違っていた。

「見比べてみるとわかるんですね」

「今わかったな」

「ええ」

委員長の言葉に頷くアナウンサーであった。

「何となくですけれど」

「何となくであればわかったな」

「はあ」

ここでもかなり強引な委員長であった。アナウンサーも頷くしか

ない。完全に彼のペースだ。

「まあ一応は」

「そしてだ」

「そして？」

「違いの次は甲乙だ」

つまり決着ということだった。

「どちらが上か」

「それがこの番組の本題ですけれど」

「人生は勝負なり！」

またこの委員長のペースになっていた。

「さあ諸君！」

「誰に言ってるんだろ」

「屋台の人達は作り終えたから視聴者じゃないのかな」

今の呼び掛けの意味はスタッフ達にはわからないものだった。

「今ここに！伝説の勝負が決まるのだ！」

「よっし！どっちが上か！」

「これではつきりするとよ！」

「北海道を制覇した俺達兄妹のラーメン！」

「絶対に負けないわよ！」

彼等は彼等で盛り上がっていた。その熱さの中で今審査が行われるのであった。

審査員達はそれぞれのラーメンを食べる。当然委員長も。雄大達も光達もどちらも自分達が勝利を掴むものと信じて疑ってはいなかった。

「勝つのは俺達だ」

「そうよ」

「おいどん等のラーメンは無敵ばい」

「そうたい」

それぞれそんな調子だ。そんな調子で判定を待っていた。そして今委員長が前に出てその判定を下すのであった。

第六章

「さあどちらでしょうか」

自分も食べていたアナウンサーがここで言った。

「誰が勝つのか。それは」

「だから俺達だって言ってるだろうが」

「おいどん達ばい」

やはりどちらもこの状況でもそれぞれの勝利を信じて疑ってはいなかった。

「俺達の北海道ラーメンこそが」

「おいどん達の九州ラーメンが」

そんな調子だった。そして今。その判定が下された。

「九州！」

委員長は右手を高々と掲げて宣言した。

「九州ラーメン桜島！」

「当たり前ばい！」

「うち等のラーメンは無敵とね！」

二人はその言葉を聞いて思いきり力瘤を作るのだった。

「それでこれは当然の結果とね」

「それでも誇らしいことは誇らしいとね」

「多くは言わない！」

委員長はここでも己の美学を徹底させていた。

「最高の味だった！以上！」

「そうか、最高の味か」

「そうなのね」

そして光も舞もそれだけでわかったのだった。

「なら俺達はその最高の味を超えてみせる」

「今度こそね」

「またおいどん達に勝負と挑むとね？」

「そげんつもりとね」

「ああ、そうさ」

「やってやるわよ」

光達も勝負に負けたとはとても思えない堂々とした調子であった。

「今度戦う時は」

「私達の勝利だからね」

「おいどん等は最強たい」

「その最強はラーメンは常に進化するとね」

二人はその挑戦の言葉を正面から受けてそれぞれ言うのであった。

「そげんこつだから」

「何時でも誰の挑戦でも受けるとな」

「そうだ、そうあるべきなのだ」

また委員長が言い出すのだった。

「それこそが最強！それこそが最高！」

「そうなんですか」

「料理とは何ぞや！」

アナウンサーの言葉を聞いてはいないが勝手に宣言を続けるのだった。

「それは進化すること！」

またこんなことを言うのだった。

「進化しさらなる上を目指す！それが料理だ！」

「ラーメンもなのですね」

「そうだ。ラーメンもまた然り」

老人は遙か彼方を見据えつつ述べた。

「だからだ。さらに上を目指しそこに突き進むのだ」

「そういうものですか」

「見よ！」

今度は天を指差してきた。

「天に一際白く輝く星」

「赤じゃないんですね」

「巨人の星は撃ち落とすべし！」
この委員長も巨人が嫌いなようである。
「あの白い星こそが料理人の星なのだ！」
「ええと、あの北極星がですよね」
「その通りだ。北極星は帝王の星」
今度は世紀末救世主の如き話になっている委員長だった。
「その帝王の座は決して温まることはない」
「恒星なのにですか」
「帝王！それは永遠に遙か彼方へ邁進する者！」
あくまでこの委員長の主観である。
「料理人とは全てそうなのだ！」
「おいどん達の戦いはまだはじまったばかりたい！」
「そうばい！」
二人は二人で力瘤を入れて叫んでいた。
「これからラーメン道を突き進むとね！」
「この果てのないラーメン道を！」
「なら俺達もまた」
「そのあんた達を倒すよ」
光も舞も同じだった。
「それも全力でな」
「それであたし達がラーメンを極めてみせるぞ」
「何か凄いことになってるよな」
「何だ？こりゃ」
スタッフ達はこの気温を十度は確実にあげていそうな熱さに閉口しつっ言い合うのだった。
「帝王とかラーメン道とか」
「話が変な方向にいつてるよな」
「どう見てもな」
「これにてこの戦いは終わった」
またしても場を仕切りだす委員長だった。

「だが勝負は！終わりではない！」

マイクなぞ一切不要の大音声であった。

「料理の対決に終わりはないのだから！」

その通りだった。料理人の歴史にその名を残す城嶋雄大、麗夫婦が永遠のライバルである北海道の田中兄妹との初対面でありその壮大なラーメン道のはじまりであった。これからも二人は最高のラーメンを目指し精進していった。そのはじまりのエピソードがこの話だ。

ラーメン馬鹿

完

2008・12・30

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8435f/>

ラーメン馬鹿

2010年10月8日15時30分発行